## 地域の様子を知る

## 2 文化財エスノグラフィーとは何か

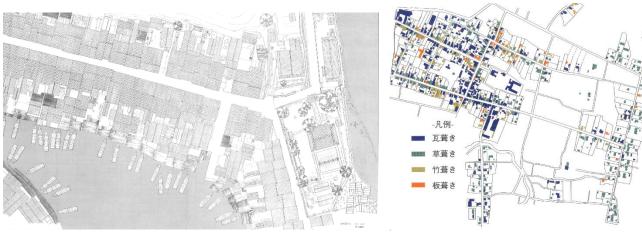


図1 従来の伝建調査の代表的手法 デザイン・サーヴェイ 1)

図2 在郷町の都市史的研究 2)

文化財エスノグラフィーとは、伝建を理解するための社会学的なアプローチを指す。これまで多くの伝建で行われてきたデザイン・サーヴェイ(図1)や在郷町の都市史研究(図2)は、建築群の外観や配置、都市空間の多様性に照準を合わせている。そのため、伝建で生活する住民や文化財に関わる人々の関係性が把握しづらかった。

もともと、エスノグラフィー(ethnography)とは、ギリシア語の「(異なった)民族(ethnos)」と「書く(graphein)」を基にした造語で、多様な民族を研究する学問分野の意味で使われてきた。しかし、「民族学(Ethnologies)」という言葉が別に作られたため、エスノグラフィーが異なった民族の詳しい記述という意味に限定されるようになった<sup>33</sup>。最近では、エスノグラフィー調査の手法が多様化し、以下のようにまとめられている。

	誰が	誰を、何を	どこで	どのように	何のために
アクティブ・インタビュー	質問者	回答者		能動的に協働して情報 を構築	解釈の実践、多元的 な語り
フェミニスト・エスノグラ フィー	女性調査者	女性調査協力者		共感と連帯、しかし裏 切りや搾取の可能性も	女性の経験・女性間 の差 <b>異</b> の可視化
ネイティヴ・エスノグラ フィー	当事者とピア・グループ	自分の問題		集団の内側から	表象の政治批判
当事者調査	複数の調査者または 調者と <b>現</b> 場の人々	自分の問題			問題への対処
アクション・リサーチ	調査者と <b>現</b> 場の人々	<b>現</b> 場で <b>生</b> 起する問題		協働	変革・エンパワーメ ント
チーム・エスノグラフィー	自分	調査協力者		協働、データ共有、多 声型アプローチ	視 点 の 複 数 化 、 フィールドの拡大
ライフストーリー	調査者	調査協力者		対話型構築、相互行為 の積み重ね、時間性	個人の生の全体性へ の接近、経験の <b>生</b> 成
オート・エスノグラフィー	自分	自分		感情経験の内省的喚起	知の制度批判
オーディエンス・エスノグ ラフィー	調査者	メディアの視聴者、 読者	メディア利 <b>用</b> の場	ともに視聴、消費	メディアが利 <b>用・</b> 解 釈する文脈に注目
マルチサイテッド・エスノ グラフィー	調査者	調査協力者・モノ・ 情報など	複数の場所	移動	グローバル化する世 界の理解

表1 エスノグラフィー調査の「新しい」アプローチー覧 4)

本研究プロジェクトで取り組む文化財エスノグラフィーは四つの位相となるが、表1に挙げられたキーワードに基づいて整理すると以下のようになる。

- ・第一の位相: 伝建の社会構造を理解するためのセクション(キーワード)を設定する。
- ・第二の位相:文化財関係者に対し、複数の研究者によるチーム・エスノグラフィーを行う。
- ・第三の位相:地域住民・高校生らと協働して文化財アクション・リサーチを行う。
- 第四の位相:研究成果をわかりやすい言葉と図版を用いて地域へ還元する。

伝建での研究テーマを自主防災に定めた場合、伝建の中で最も住民の主体性が発揮されるのが消防団の活動と祭りであると推察される。更に、消防と祭りを支えているのは地域への帰属意識や郷土愛であり、そのコアにあたるローカル・アイデンティティに注目することで、伝建まちづくりを整理できると考えられる。また、伝建で日常生活を送る中で、セーフティーネットとなるのが社会福祉関連の市民団体や NPO の活動であろう。

このため、第一の位相では、伝建の社会構造を理解するためのセクションとして、消防団、祭り、ローカル・アイデンティティ、NPO を挙げることとした。

第二の位相では、地域内で多様な役割を担う方にお話を伺う際、複数の研究者が発話するチーム・エスノグラフィーを選択した。というのも、協力者の属性は、伝建を火災から守る消防団、消防署、伝建での祭りの実行委員会や祭りを支える方々、文化財(特定物件)の所有者、文化財(特定物件)で生業を営む方、市町村の伝建担当者、伝統的建造物を修理できる技術者、伝建近辺で NPO として活動されている方など、多岐に及ぶ。質問者は、互いに関連するテーマをうまく切り分け、質問の角度を切り替える必要があるため、複数人の研究者が同席するチーム・エスノグラフィーがふさわしいと考える(図3)。

第三の位相では、市内の高校生を対象とした小論文コンクールやクロスロードを実施することで、これまで伝建に関心を持たなかった人々と協働し、伝建のレジリエンスの向上に資する取り組みを行う。

第四の位相では、チーム・エスノグラフィーや文化財アクション・リサーチを通じて得られた成果を可能な限りわかりやすく記述し、公開することとした(図4)。地域住民の目線に立ったフィードバックは、一方通行になりがちなエスノグラフィー調査の欠点を補い、本研究プロジェクトのテーマである伝建における自主防災の可能性を押し広げてくる、と期待される。

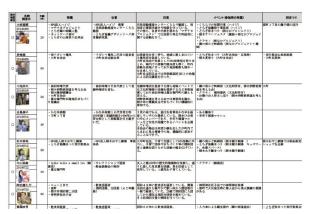


図3 チーム・エスノグラフィー調査シートの一部(第二の位相)



図4 ミニコミ誌「でんけん」の発行(第四の位相)

## 参考文献

- 1) 明治大学神代研究室、法政大学宮脇ゼミ(編): デザイン・サーヴェイ:伊根亀山 舟屋のある集落と祭、復刻 デザイン・サーヴェイ、彰国社、p.61、2012 年 4 月
- 2) 桜川市教育委員会: 真壁の町並み、p.13、2006 年 3 月
- 3) 小田博志:コラム:エスノグラフィーという言葉 フィールドワークとの関係、エスノグラフィー入門 <現場>を質的研究する、 春秋社、pp.8-9、2010 年 4 月
- 4) 藤田結子,北村文(編):「新しい」アプローチー覧、現代エスノグラフィー:新しいフィールドワークの理論と実践、新曜社、pp.8-9、 2013 年 3 月